

山北町立山北中学校

研究テーマ：「個別最適かつ協働的な学びづくり ～汎用的な山北SCの活用をめざして～」

1 実践の目的

昨年度までの研究では「山北スタンダードカリキュラム（以下、山北SC）を意識した学習に取り組むことが、『社会で生かせる思考力・判断力・表現力』（＝課題解決力）を高めることにつながる」ことがわかった。今年度は、教科のみに囚われず、特別活動や総合的な学習の時間でも山北SCを意識した学習に取り組み、各教科と総合的な学習の時間のカリキュラムを相互に高めながら、実践の場を広げ、生徒が資質・能力を身につけられるようにする。また、令和6年度の学習状況調査では、学習した直後の理解度は高いが、長期的な「知識・技能」の定着に至っていないことがわかった。総合的な学習の時間を軸にした教科横断的な連携を重視し、長期的な学習定着の後押しをしていきたいと考え、今年度の研究テーマを設定した。

2 実践の内容

（１）校内研究の体制づくり

全教職員が、教科グループ、特活グループ、総合グループ、道徳グループのいずれかに所属し、研究授業や研究協議等を通して、山北SCの汎用的な活用を検討し、山中総合プランの開発につなげた。各授業では、山北SCを活用しやすいように、思考・判断・表現での評価を行うことを共通化した。

（２）校内研修会の様子

夏季休業中の研修会では、長年本校の研究にアドバイスをいただいている元帝

京大学の矢野教授の紹介で相模原市立内出中学校の小森教諭を招き研修を行った。ここでは、ループリック作成や教科で得た資質・能力を総合的な学習の時間に生かす試みについて紹介された。その他、教科の研究全体会では桜美林大学の田中教授、道徳では横浜国立大学の青山教授、総合の研究全体会では、再び矢野教授にお越しいたいただき、指導助言をいただいた。



図1

職員には職員会議で、生徒には学級で、研究の全体像について、図2のように説明をした。

よりよい総合的な学習の時間のカリキュラム作成のため、各教科の資質・能力を総合のひとつのツールとして機能するように、山北SCと各教科の資質・能力を意識した授業をめざすための共通理解を図った。



図2

(3) 研究授業、研究協議の様子

図3のように、総合的な学習の時間を軸にした教科横断的な連携がなされるよう授業・協議を行った。こちらも図2と同様に寿司を模した図で表すことで職員・生徒が研究全体像とのつながりをイメージしやすいように工夫している。



図3 研究授業のイメージ

(4) 0歳から15歳までの一貫教育・保育

今年度は、文化祭の合唱コンクールを6年生が観賞、2年生が向原保育園で保育実習・園児の招待企画(クリスマス会)の実施、3年生が岸幼稚園・やまきたこども園・向原保育園児との交流を行った。

3 実践の成果と課題

(1) 校内研究の体制

グループごとに、それぞれの教科や活動に対して、協力して指導案作成や協議の設定をすることができた。

総合的な学習の時間では、出前授業を行う際に、準備のガイドラインを作成した。これまでコロナ禍で自粛し、このような教育活動が途絶えていたため、本校では出前授業実践までの段取り方法が曖昧となっていた。今後も外部機関との連携を進めていくため、この1年間で確認された手順(図4)

を周知し今後も生かしていきたい。

出前授業実施までの流れ(例)

- ① 学年会・総合部会で提案
- ② グループリーダーに相談
- ③ 管理職に相談(事業所・市町村で手続きが異なる)
- ④ 各事業所へ提案前であるが可能であるかを相談
- ⑤ グループで提案・相談→管理職へ再度相談
- ⑥ 職員会議で提案
- ⑦ 学年で各事業所へ連絡・打ち合わせ

図4

(2) 校内研修会

小森教諭の研究結果によると必ずしも教員が身につけさせたいと考える資質・能力は、生徒の総合的な学習の時間で生かされているものではないことがわかった。

そこで、本研究にも教員と生徒に総合的な学習の時間で必要とされる資質・能力の共通理解を後押しする手立てが必要であることがわかり、このことが職員・生徒が相互に確認できる研究資料(寿司のシステム図)作成のきっかけとなった。

生徒に対して、これまで行った各教科の授業で総合的な学習の時間で活用できた・できそうなことはどんなことであるかアンケートを行った。9教科とその他で生徒が認知している内容について質問した。以下の内容は生徒が答えた内容をAIテキストマイニングで教科ごとに分析したものである。今回は2教科・その他(生徒が独自に活用できると判断)の結果を掲載した。

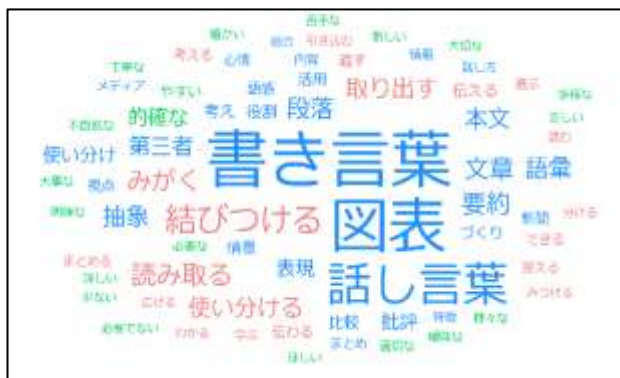


図5 国語科

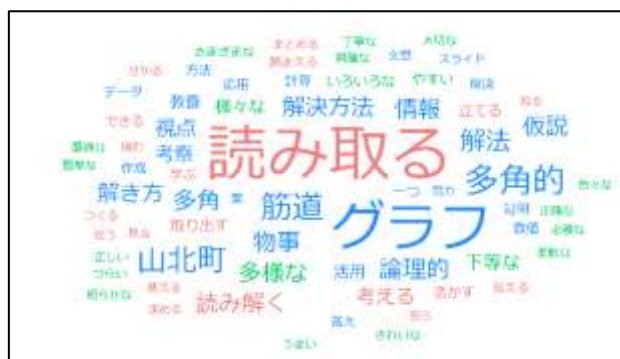


图6 数学科

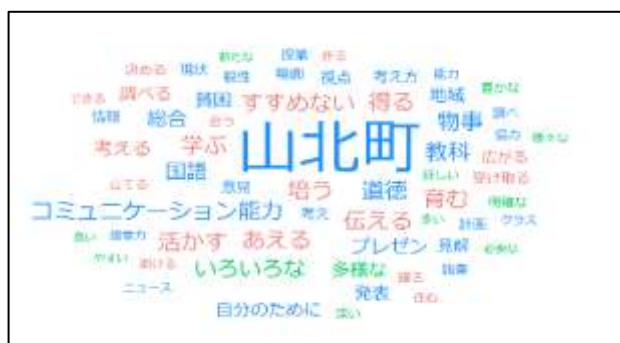


図7 その他

(3) 研究授業、研究協議

全教職員で山北 SC を活用した研究授業を行うことができた。課題は、「よりよい総合的な学習の時間のカリキュラム作成のため、各教科の資質・能力を総合のひとつのツールとして機能するように、山北 SC と各教科の資質・能力を意識した授業を目指す」ということが教職員や生徒へ年度当初は浸透していなかったことである。年度途中で、

職員会議や学級で伝える機会を設けたが、次年度は早い段階から周知できるようにしたい。

(4) 0 歳から 15 歳までの一貫教育・保育

2年生の振り返りでは、夏休みの探究の取材で、相手の方に対する質疑応答や丁寧な言葉づかいが求められたが、保育園実習での園児に対する言葉がけはまた違うものが求められるなど、社会的スキルの向上が感じられる内容がいくつか見受けられた。他者意識、第三者視点は各教科で散見されるキーワードだが、実践的に行えるこの機会には貴重なものとなった。3年生は、2月に3園との交流を行う。そこでの体験や振り返りに期待したい。

4 今後の展開

(1) 校内研究の体制・校内研修・研究授業

来年度も今年度に続き、4つのグループで研究（教科 G・総合 G・特活 G・道徳 G）を進める。教職員一人ひとりが授業提案もしくは公開授業を行うことを継続する。教員のねらいと生徒の内容理解がマッチしていくようにする。

(2) 0 歳から 15 歳までの一貫教育・保育

引き続き、園や小学校との連携を続ける
とともに、小学校との探究の系統的なつな
がりを検討していく。

(3) その他

昨年 12 月に「かながわ学びづくり推進地域研究委託事業に係る児童・生徒アンケート」を行った。「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、取り組んでいますか？」という問いに対して、取り組んでいる生徒は 75.7%という結果が出た。3月にも実施予定であるが、その変容についても注視していきたい。